

はじめに ～「ヌーソロジー」とは何か？～

まず、『ヌーソロジー』とは何か？について、最低限のことを説明しておく。

『ヌーソロジー』とは、『半田広宣（ハンダ コウセン）』という人が提唱した、独自の思想体系のようなもので、半田さんの Twitter 上では、「**ヌーソロジーとは、物質と精神の関係を空間という視点から接合しようとする具体的なアイデア論**」と説明されている。ここで、「物質」は、物理学や自然科学などの理系分野。「精神」は、人文学や神秘思想などの文系分野との関わりが強いので、その双方の架け橋となる思想体系になるのではないかという展望がある。

そして、元は『冥王星のオコツト（OCOT）』と名乗る、チャネリングソースの情報から作られている。1989 年、コウセンさんが自分の専門である物理学の研究をする日々を送っていた所、突然それは起きたらしく、それは頭の中に入り込むようにやってきて、対話を求めてきたらしい。チャネリングの形式としては、その頭の中にいる「何か」との対話の日々ということになる。（詳細は、書籍『2013：人類が神を見る日』を参照。）

初めは、コウセンさんは、自身に起こったことに対して半信半疑でいたが、それはとてつもない情報を提供してくるということが分かり、その内容をワープロで打ち込むことにし、それを『シリウスファイル』と名付けることにした。そして、オコツトとの対話は約 1995 年で終わり、その後も解説作業が続いた。そして、その内容が、「ヌーソロジー」という思想体系としてまとめられることになる。

書籍がいくつか出たが、「精神世界」「スピリチュアル」などのコーナーに置かれる割に、難しい用語や数式、学者の名前なんかがいっぱい出てくる難解な本・・・というのが一般的な印象ではないかと思われる。その難解さ、絡んでくる分野の多様さは、代表書籍である『2013：シリウス革命』を軽く見ると分かる。そうして難解でメジャーにならない中、水面下でファンがいたりした。そして、「2013 年」という、ヌーソロジーで重要視される年になって以来、また活発に動き始めた。

自分がネット上に公開したテキスト「Raimu のヌーソロジー入門」にて、ヌーソロジーの内容を説明している。その中の「ヌーソロジー基本概要」などを整理しつつ、その他に必要な情報を入れ、半田広宣さんによる監修の元、基本テキストとして相応しいように改良を行い、さらに、「**変換人生活のためのヒント**」をテーマにテキストを加えたのが本書の内容である。ヌーソロジーの参考書のように扱って欲しい。

目次

ヌーソロジー導入部.....	4
◇◆ヌーソロジーとグノーシス思想◆◇.....	4
◇◆ヌーソロジー年表◆◇.....	6
◇◆ヌーソロジーが目指すものまとめ◆◇.....	8
ヌーソロジー基本概要部.....	14
◇◆4つの基本因子◆◇.....	14
◇◆ペンタープ・システム◆◇.....	16
◇◆「精神」と「付帯質」。それから仏教用語◆◇.....	17
◇◆全体像における4つの意識領域◆◇.....	18
◇◆流れる4つの力◆◇.....	20
◇◆「ノウス (NOOS)」と「ノス (NOS)」◆◇.....	22
◇◆タカヒマラ・テンプレート◆◇.....	24
◇◆人型イメージに囚われないこと◆◇.....	26
◇◆13の「観察子」◆◇.....	26
◇◆「次元観察子 ψ 」について◆◇.....	30
◇◆「次元観察子」と原子との関係◆◇.....	32
◇◆「大系観察子」について◆◇.....	34
◇◆ヌーソロジーと「カバラ」について◆◇.....	36
◇◆観察子と「生命の樹（セフィロトの樹）」◆◇.....	38
◇◆観察子と西洋占星術における惑星との対応◆◇.....	40
◇◆その他、「観察子」における重要事項◆◇.....	42
◇◆高次の「観察子」について◆◇.....	44
◇◆その他、重要事項◆◇.....	46
◇◆ヌーソロジー全体像の総括◆◇.....	54
ヌーソロジー本論入門部.....	56
◇◆ヌーソロジー全体と実践編の位置づけ◆◇.....	56
◇◆現在の空間と次元観察子 $\psi_1 \sim \psi_2$ について◆◇.....	58
◇◆次元観察子 ψ_3 と反転した空間の発見◆◇.....	60

◇◆光速度のイメージ◆◇.....	61
◇◆時間軸の反転の式◆◇.....	62
◇◆4次元目の軸の発見◆◇.....	63
◇◆「視野平面」として景色を見る◆◇.....	64
◇◆反転した空間の反対と次元観察子 $\psi 4$ ◆◇.....	65
◇◆内向タイプと外向タイプについて◆◇.....	66
◇◆「アニマ」や「こころ」や「シャドウ」や「ペルソナ」◆◇.....	68
◇◆哲学用語いろいろ◆◇.....	70
◇◆次元観察子 $\psi 5$ の発見◆◇.....	72
◇◆「エーテル体」と「素粒子」について◆◇.....	74
◇◆更なる高次への道について◆◇.....	76
変換人生活のためのヒント.....	78
■反転認識のヒント.....	78
■ミクロ知覚と女性性について.....	82
■自己認識のヒント.....	85
■爬虫類人についてあれこれ.....	87
■アセンションのためのヒント.....	89
■ノス（NOS）的思考について.....	91
変換人型ゲシュタルト攻略情報.....	94
ヌーソロジー用語一覧.....	96

ヌーソロジー導入部

◆◆ヌーソロジーとグノーシス思想◆◆

ヌーソロジーの持つ方向性と古代グノーシス思想について

まず、始めに、ヌーソロジーと関わりの深い「グノーシス」について述べていく。

「グノーシス (gnosis)」とは何か？「グノーシス」とは、「認識」(あるいは「知識」)という意味であるが、それは主に古代において「神の知性」とも呼ばれていた「叡智」の認識にあたる。この「叡智」とは、知識として頭で理解するようなものではなく、自身の精神の中で何か直接的に体験することによって知るものである・・・という考え方が古代にはあった。

また、グノーシスの考え方では、人間の「自己」の中には、この「叡智」に通じている「神性」というのがあり、それを認識することも重要視される。従って、「グノーシス」は自己の本質を認識することにも結びついている。

紀元前からある古代思想として、この「グノーシス」を追求する立場というのがあった。それから、他にも「神秘思想」にカテゴライズされ、深淵な「宇宙論」や「哲学」を保持している立場というのもあった。古代エジプトのヘルメス学、古代ペルシャの宇宙哲学、ギリシャのオルフェウス教、カルデアの占星学・・・などがそれに該当する。これらの正確な起源をさかのぼるのは、考古学的に少し難しい所だが、ヘレニズム時代と呼ばれる頃（紀元前約 334～西暦 30 年頃）にそれらの思想が合流してまとまった動きがあり、古代の「秘教」や「魔術」、「オカルティズム」の思想において、それらに追従する一派というのがあった。

紀元前からあるそうした動きが、原始キリスト教の一派として流れてくるようになる。これが「グノーシス主義」と呼ばれ、後に、「キリスト教グノーシス主義」として定着するようになる。

グノーシス主義には、狭義の意味と広義の意味とがあるが、狭義の意味としては、キリスト教の一派として存在する「キリスト教グノーシス主義」になり、広義の意味としては、それ以前からある、普遍的な「グノーシス」を追求する立場になる。ここではこれを「グノーシス思想」と呼ぶことにする。

グノーシス思想の特徴

キリスト教内部で発生した「キリスト教グノーシス主義」は、特有の説なども付加されて持つようになり、グノーシス思想とはまた別の特徴があるが、そのベースにあるものは、ヘレニズム時代にできた「グノーシス」の考え方に基づく宇宙論である。

有名なのが、反宇宙的な考え方であり、この宇宙を作り出したのは「善の神様」と言えるような志向神であるが、人間の世界を作り出したのはそれとは別に「悪の神様」と言えるような神様だという風に考えられている。この「悪の神様」にあたるのが「デミウルゴス」などとも呼ばれている。従って、この世界はまるで牢獄のようなものなので、「人生は牢獄である」という風に捉えるのも、グノーシス思想の特徴となる。

人間はこの「デミウルゴス」の作り出した地上の世界から、自らの中にある神性を認識し、至高神のいる天上の世界へと向かう…というのが、グノーシス思想の簡単なシナリオとなる。地上の世界と天上の世界との間には、「星辰界」と呼ばれる領域に7つの階層があり、この7つの階層に、月⇒水星⇒金星⇒太陽⇒火星⇒木星⇒土星といった、7つの星を当てはめて考える一派もいた。

他にも、「善と悪」、「真と偽」、「霊と肉体」、「イデアと物質」、「男性原理と女性原理」といった二元論で物事を捉える特徴がある。その他の細かい所は、広まった時代や場所、流派によって異なる。組織的に統一的に運営されていたというよりは、影響力の高い流派が出てきたり、時には対立する流派が出てくることによって発展していったのが、グノーシス思想の特徴と言っても良い。

蘇ったグノーシス思想

ヌーソロジーは「蘇ったグノーシス思想」とも言われている。その目的は、『変換人型ゲシュタルト』と呼ばれるものを認識しつつ、「グノーシス」を行うことだからである。そうしている内に、自分自身の「自己」であったり、「霊魂」であったり、哲学者プラトンが「イデア」と呼ぶものなどが、知識ではなく実感のレベルで分かってくるようになってくる。それから、グノーシス思想の特徴として「二元論」を扱うというのがあるが、ヌーソロジーでは、「物質」と「精神」の二つを、よりシステムティックに、双方を否定することなく、ニューサイエンスっぽく扱っていくことになる。

ヌーソロジー基本概要部

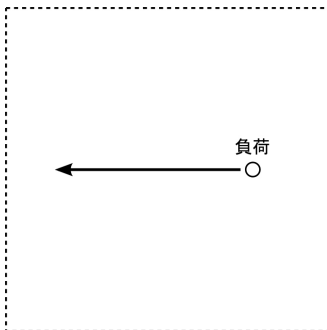
◆◆ 4つの基本因子 ◆◆

さて、ヌーソロジー情報の内容に入る。まずは、4つの基本因子となるものからだ。

ヌーソロジーでは、割と幾何学的な、ミクロ寄りの視点の世界において、

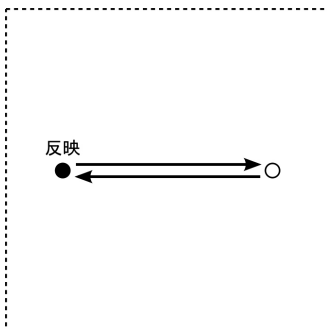
『負荷』・『反映』・『等化』・『中和』という、原理的な概念がある。ヌーソロジーは、この『負荷』・『反映』・『等化』・『中和』の4つの原理で、あらゆる構造を捉えようとするので、これについてそれぞれ説明する。

<負荷>



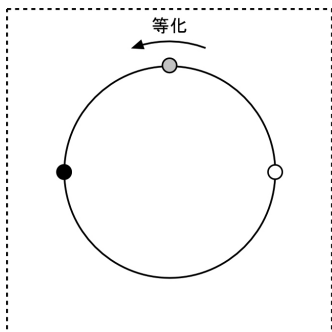
とある始原となる存在があったとして、そこから開始する作用にあたる。数字では、「1」に対応する。

<反映>



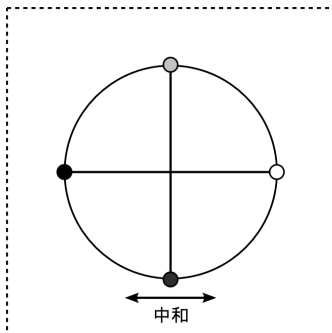
『負荷』という開始の力に対して生まれる、それとは逆向きの作用にあたる。数字では、「2」に対応する。

<等化>



『負荷』と『反映』という、背反するものを「統合」するような「回転」の作用、または、対称性を見出す作用にあたる。数字では、「3」に対応する。これは、『負荷』と『反映』を、新たな次元の視点で見る力を持つ。

<中和>



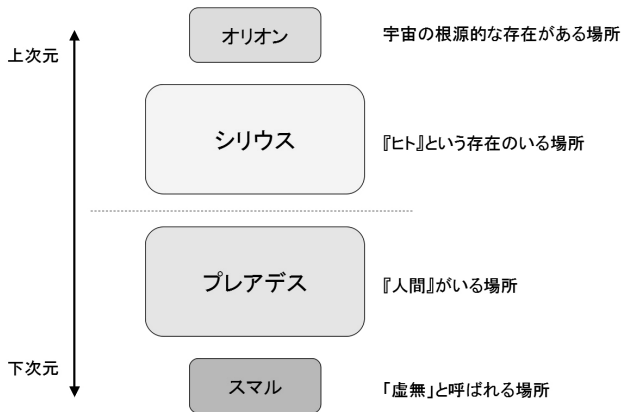
『等化』の回転に対する逆回転。回転が相殺されることにより、「分離」するような作用にあたる。また、双方の対称性を見出すのを拒む作用にもあたる。数字では、「4」に対応する。これは、新しい物質を誕生させる力を持っている。

これらは、『負荷』→『反映』→『等化』→『中和』と発展していく構造を持つ。この4つの用語は、ヌーソロジーにおいてあらゆる所に出てくる基礎的な用語なので、押さえておくべき用語である。また、『負荷』と『反映』、『等化』と『中和』などは、それぞれ、「1」と「2」、「3」と「4」に対応しているわけだが、このように奇数と偶数に対応している組が作る対立関係を、『対化』と言う。『対化』は、それぞれを『等化』するために、必要な関係になる。

◆◆全体像における4つの意識領域◆◆

まずは、全体的な世界観の話である。ヌーソロジーにおける全体的な世界像を構成している、『オリオン』・『シリウス』・『プレアデス』・『スマル』という、4つの存在について説明する。これらは、一般的には星の名前とされているが、ヌーソロジーでは、「意識の領域」とでもいえるような、特別な意味として扱う。それらの4つがある宇宙全体の世界を、『**タカヒマラ**』という。（ただ、最近はヌーソロジーが宗教的なものに見られることを避けるためか、コウセンさんはこの名称を使用しなくなっている。）

まずは、我々の意識と関わりの強い『プレアデス』と『シリウス』から順に説明する。



<プレアデス>

簡単にいうと我々が今いる世界のことを言っていて、『人間』のいる、あるいは、『人間』を作り出している意識の領域にあたる。人間である我々が、世界を認識するにあたって動く意識の領域でもある。つまり、我々のいる「地上」の領域と、その「地上」の作る（正確には地上を作っている）意識の領域と言うことができる。それから、我々が現在いる「地上」から、離れようとする際の、無意識の領域も、『プレアデス』に含んでいる。無意識があくまでも無意識である領域までは『プレアデス』であり、無意識が意識化されるようになった領域が『シリウス』とすることができる。ひとまずは、「人間の営みが行われている意識の領域」といった所である。今現在、我々がいる領域であるので、これまでも付き合っていた領域でもあり、これから、新たな視点で付き合うべき領域でもある。

<シリウス>

『プレアデス』に対して上次元にある存在にあたる。『ヒト』と呼ばれる存在がいる。これから我々が意識進化をしていく上で、『オリオン』よりも身近に関わることになる存在である。『シリウス』のことを説明するのに、よく、哲学者プラトンの提唱した「イデア」という概念が使われる。また、無意識の深層にあるものでもある。無意識は、ある領域までは、『プレアデス』領域に該当するが、ある場所を超えると、『シリウス』領域に入ることになる。また、その世界観は、『プレアデス』のような単純な物質構造ではなく、様々な物の見方が、我々に対して「反転」していて、不思議な幾何構造のような世界らしい。こうした見方を理解するには、『変換人型ゲシュタルト』というものが必要になってくると言われている。

<オリオン>

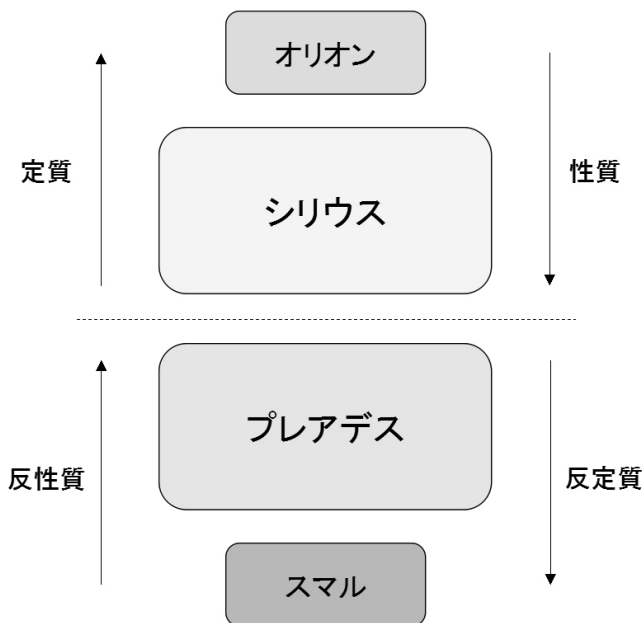
宇宙の根源の胎盤となる場所・・・といった説明ができるものである。『シリウス』より更に上次元にある。『真実の人間』と呼ばれる存在がいる。オコツトによると、「大いなる精神の進化の母胎となる力のすべてが存在するところ」「あなたがたの概念でいえば、神が存在する場所……そのようなものでしょうか」などの説明がされている。

<スマル>

『プレアデス』に対して下次元にある。『オリオン』とは対称的な存在である。オコツトの説明によると、『オリオン』と『プレアデス』の関係が完全に転倒したところに生み出されている虚無のようなもの。進化の無限性の反対側に存在させられている「『精神』の力が完全に失われてしまった空間領域」「人間が『シリウス』との連結を完全に断ってしまった空間」などと説明されている。よって、主に「虚無」と呼ばれる。コンピューターの作るデジタル空間がそれにあたると言われている。悪いモノのように扱うこともでき、ネガティブなイメージで捉えることもできるが、進化のためにはなくてはならないものでもある。オコツトはあくまで、『スマル』については、「人間の意識進化の反映として出現してくるもの」「新しい精神を作り出すためには必要な影の部分」などのことを述べている。

◆◆流れる4つの力◆◆

次に、『オリオン』・『シリウス』・『プレアデス』・『スマル』の全体を流れる、「力」について説明する。なお、ここではひとまず、分かりやすいように、「力」と記述して説明するが、正確には、そうした「力」を持つ存在、あるいは、そうした「力」の構造そのもの・・・といったものに当たる。『シリウス』では『定質』・『性質』が、『プレアデス』においては、そこから反対の力へと転倒した、『反性質』・『反定質』という力が流れている。以下、それぞれについて説明していく。



<定質>

『シリウス』領域において、『オリオン』へと向かう力。『シリウス』領域において『等化』の7段階の力を持つ。『定質』の「定」とは、「確実化した力」という意味を持ち、これは精神の力が明確な幾何学的な形として意識化されている状態を表している。従って我々は、この「確実化した力」というのは何か？というのを、深く探求していく必要がある。人間が「植物」を食べた時、この力が強まるらしい。また、天体における「太陽」が『定質』に関係していると言われている。

＜性質＞

『シリウス』領域において、『ブレアデス』へと向かう力。『シリウス』領域においての『中和』の方向性を持つ。人間を作り出している意識の方向性と言われる。『性質』の「性」とは、「異性」の「性」であり、男性と女性とに分かれる「性」にあたる。宇宙の仕組みとしては、こうした、「男性」と「女性」のような、二元的な「性」に分かれると、そこから、無限の物を産出することができる。そして、これが『性質』の持つ力なのではないか？と思われる。人間が「動物」を食べた時、この力が強まるらしい。また、天体における「月」が『性質』に関係していると言われている。

＜反定質＞

『ブレアデス』領域において、『スマル』へと向かう力。『シリウス』領域にある『定質』と、進化の方向性が逆であり、似て非なるものにあたる。『ブレアデス』領域においての『中和』の方向性を持つ。『シリウス』領域においては、『定質』の持つ「確実化した力」に主体性を持って向かっていけば進化できる構造になっているが、『ブレアデス』領域においては、それは逆向きの力へと働く。『ブレアデス』領域において、本来なら『オリオン』に向かっているような「定められた力」を見出すのを間違え、その間違えて捉えたものを神のように崇め、自分自身の道徳として従った時、意識は『反定質』の方向へと向かうことになり、『スマル』へと向かうことになる。「宗教」「法律」「戦争」「科学」「機械」・・・『反定質』の力を持つ存在の例は色々と挙げることができるが、人間の文明の基盤を作っているものだとも言うことができる。

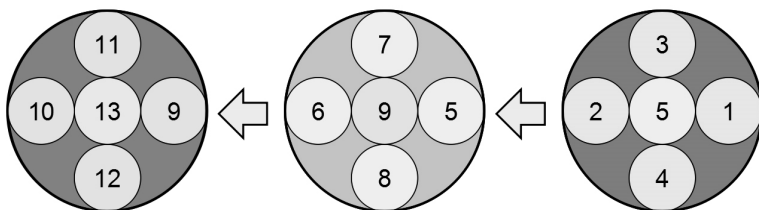
＜反性質＞

『ブレアデス』領域において、『シリウス』へと向かう力。『ブレアデス』領域においての『等化』の方向性を持つ。つまり、我々がこれから向かっていくべき方向性にあたる。実に人間的ではあるが、創造性と発展性があり、真理にも根付いているものにあたる方向性である。「芸術」などは、『反性質』の方向性にあるのではないか？と思われる。ヌーソロジーにて、『次元観察子』を認識することや、『変換人型ゲシュタルト』を学ぶことで、『シリウス』領域への空間が開けてくる。

◆◆ 13の「観察子」◆◆

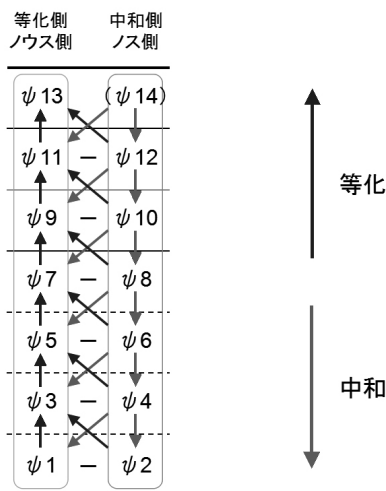
次に、ヌーソロジーにおいて出てくる、『観察子』という概念について説明する。それは、まず、『真理を解き明かすための、およそ13の要素』という説明が妥当かと思う。

(14あるとも解釈される。) オコツトが提示した、宇宙的なシステムを理論的に解析するための「鍵」である。コウセンさんは「霊」とも説明している。よって、やや抽象的なものでもある。それぞれの『観察子』の理解を深めることで、全体のシステムの理解も深めることができる。『観察子』は、『ペンタープ・システム』に対応していて、その数は「13」で区切られる。



一方、他者側との関係を含めて見ていく場合は『セブタープ・システム』(7段階システム)に対応している。その時は「14」が加わり、「13~14」が新たな対化として作り出され、そこから新しい精神が作り出される仕組みになっている。

これから我々が、当分つき合っていくのは、『プレアデス』にある観察子と言われる『次元観察子』というものなので、以下、『次元観察子』で説明する。



まず、観察子は、「奇数」と「偶数」で違う働きをする所がポイントである。

観察子は二つ一組で構成され、数字が奇数の観察子は「等化側」などと呼ばれ、数字が偶数の観察子は「中和側」などと呼ばれる。『次元観察子』の場合は、「φ（プサイ）」というギリシャ文字に数字をつけて表記される。この数字が、『ペンタープ・システム』における、『負荷』・『反映』・『等化』・『中和』、のように発展していく。1（負荷）→2（反映）→3（等化・新たな負荷）→4（中和・新たな負荷の反映）→5（さらに等化・さらに新たな負荷）・・・と続いていく。「6」は、「5」という新たな『負荷』の『反映』であり、「7」は、さらにその『等化』というわけである。こうして、単純に上昇していく構造を持つ。そして、それは、3段階の『ペンタープ・システム』に対応していて、全部で「13」あるとされる（「14」あるとも言われる）が、「8」で一つ区切りがある。これは後ほど詳しく説明する。

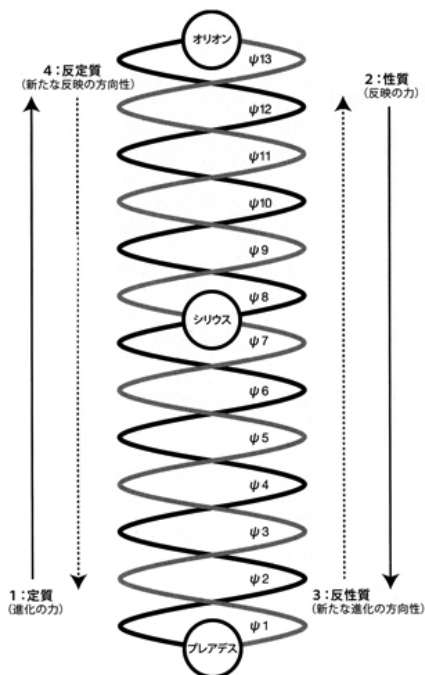
そして、「奇数系の観察子は『ノウス（NOOS）』」「偶数系の観察子は『ノス（NOS）』」と呼ばれる。そもそも、これが『ノウス』と『ノス』の本質である。『ノウス』を「天使的な力」、『ノス』を「悪魔的な力」などと捉えるのではなく、こうした理解の深め方をする必要がある。ノウス、つまり奇数系の観察子が『等化』の力を持っている。ノスは、『中和』の力である。これが重要であり、いわゆる「天使的な力」と「悪魔的な力」の本質を、この双方の力がそれぞれ持っている。

また、奇数系観察子は「自己の方向側」、偶数系観察子は「他者の方向側」と呼ぶこともできる。これは、ヌーソロジーをより詳しく学んでいくと分かることだが、『等化』は意識をより本性的な「自己」の方向へ、『中和』は意識をより本性的な「他者」の方向へとたらし。

まとめると、奇数系は、「等化側」「負荷側」「ノウス側」「自己の方向側」と呼ぶことができる、偶数系は、「中和側」「反映側」「ノス側」「他者の方向側」と呼ぶことができる。この区別が、ヌーソロジーにおいて、重要な所になる。奇数系観察子と偶数系観察子を、実践的に学ぶことで、その本質がだんだんと理解できるようになってくる。

◆◆「次元観察子 ψ 」について◆◆

次に、『次元観察子 ψ 』について、詳しく説明する。まず、コウセンさんが、オコツトとの交信の初期の段階で自動書記によって伝えられた図がある。（「2013：人類が神を見る日」より引用。）



交信初期の時点では、この図が『タカヒマラ』の全体像を表している図だと説明され、この中の「13」の波が、『次元観察子』であると説明される。それは、『定質』による上昇と、『性質』による下降の際、「13」に分けられた構造になる。

『次元観察子』は、オコツトによると『タカヒマラ』を構成している次元ユニットのようなものと説明される。やはり、『次元観察子』は、「次元ユニット」と呼ぶしかないような、曖昧なものにあたると思われる。この13の次元ユニットは、『変換人型ゲシュタルト』を身につける為に、我々が一つ一つ理解を深めていくべきものでもある。それは、人間の意識を取り巻く、幾何学的な構造のようなものであり、これが、『プレアデス』の領域における、人間の意識の構造を作り出している。

『次元観察子』の全体像は、以下の図ようになる。

ノウス側ーノス側

$\psi 13$ ($\psi 14$)	人間の観察精神(とその反映)	変換質
$\psi 11 - \psi 12$	人間の定質と性質	中性質
$\psi 9 - \psi 10$	人間の思形と感性	調整質
$\psi 7 - \psi 8$	ヌース的愛とヌースの時空	元止揚
$\psi 5 - \psi 6$	自己と自我	
$\psi 3 - \psi 4$	主体と客体	
$\psi 1 - \psi 2$	空間と時間(またはミクロとマクロ)	

右に書いてある対応要素も、押さえておくと良い。この中で、現在の人間の意識の位置にあたるのが「 $\phi 1 \sim \phi 2$ 」である。ここには、単純に現代物理学が「空間」と「時間」と呼んでいるものがあり、そして、その二つしかない領域にあたる。人間の自我は、ここから自分自身を根拠づけていた無意識領域（『反性質』）を自意識化し、『定質』を作り上げるために上昇していくことになる。「 $\phi 1 \sim \phi 2$ 」の意識でしか世界を捉えてないものを、「 $\phi 3 \sim \phi 4$ 」の意識で捉えられるように拡張していく。よってまず、「 $\phi 3 \sim \phi 4$ と当分向き合うことになる。これから、「 $\phi 3 \sim \phi 4$ 」や、「 $\phi 5 \sim \phi 6$ 」といったものを、どんどん『顕在化』というのをしていく。『顕在化』とは、それぞれの観察子の構造をハッキリ捉え、それを知覚として認識し、それが自分の中にもある精神の構造を作り上げていると理解することである。「元々、無意識にあったものを顕在状態にする」という意味で『顕在化』と呼ぶ。『顕在化』は、「 $\phi 3$ が顕在化する」「 $\phi 5$ が顕在化する」などという使われ方をする。これは、突き詰めると、より深い意味も持っている用語だが、ひとまずの意味はそんな所である。

『次元観察子』は、「 $\phi 1 \sim \phi 8$ 」で、『元止揚』と言われていて、ここに区切りがある。全部だと13もあるが、まずはここで一息つけるようにするという姿勢で良いと思う。「 $\phi 9 \sim \phi 10$ 」は『調整質』、「 $\phi 11 \sim \phi 12$ 」は『中性質』、「 $\phi 13 \sim$ 」は『変換質』と呼ばれる。ここは、まずは言葉だけ押さえておけば良い所である。

◆◆観察子と西洋占星術における惑星との対応◆◆

『観察子』というものは、太陽系にある「惑星」とも対応している。惑星は、西洋占星術の世界では、精神の中の何かしらの作用を表すと言われているが、ヌーソロジーでは正しく、『次元観察子』と『大系観察子』の双方の投影」と言われていて、意識進化のためのユニットとして働く。ちなみに、ここでは、「太陽」と「月」と「地球」も、「惑星」と同様に扱う。

以下、ヌーソロジーにおける、『観察子』と「惑星」の対応を、西洋占星術にて解釈されている例をキーワードにして並べつつ、合わせて述べていく。

※ここで出てくる「惑星 X」とは、オコツトが、近年に新発見されると述べた惑星である。ただ、その発見については、現段階（2016 年頃）では謎に包まれている。2003 年に「エリス」という準惑星が発見されているが、その関連性は分からない。また、「冥王星」は、2006 年に、正式な惑星の定義から外れたが、これは、科学の持っている見解として、ヌーソロジーでは、特に重用視はしない。ヌーソロジーにおける冥王星は、西洋占星術での扱いと同様、依然として、人間の意識において、重要な位置づけとなる惑星として扱うことになっている。

月のサイン（ $\psi 2$ ：時間・マクロ， $\Omega 2$ ）：

自分のパーソナリティ、受動性、表面的な心、子供の段階、女性的な面

水星のサイン（ $\psi 3$ ：主体， $\Omega 3$ ）：

知性、言語、伝達、スピード、神経

金星のサイン（ $\psi 4$ ：客体， $\Omega 4$ ）：

愛情、恋愛、情動、快楽、コミュニティ

太陽のサイン（ $\psi 5$ ：自己， $\Omega 5$ ）：

自分の本性、自主性、本領発揮、成熟した段階、中心

火星のサイン（ $\psi 6$ ：他者・自我， $\Omega 6$ ）：

闘志、戦い、闘争本能、武器、戦士の赤

木星のサイン（ $\psi 7$ ：意識進化， $\Omega 7$ ）：

成功、問題解決、和、学識と霊性の両方、賢者の青

土星のサイン（ $\psi 8$ ：時空， $\Omega 8$ ）：

試練、忍耐、現実的、機械、父なる黒

天王星のサイン（ $\psi 9$ ：人間の思形， $\Omega 9$ ）：

革命、前衛的、テクノロジー的なもの、学問

海王星のサイン（ $\psi 10$ ：人間の感性， $\Omega 10$ ）：

靈感、霊・夢・術・感性を使うもの全般、曖昧なもの、宗教

冥王星のサイン（ $\psi 11$ ：人間の定質， $\Omega 11$ ）：

根源的な自己、究極、死と再生

惑星Xのサイン（ $\psi 12$ ：人間の性質， $\Omega 12$ ）：

？？？、資本主義の混沌？、人間らしさ？

これらの意味は、『次元観察子』とも関係しているが、より本質的な所は『大系観察子』が該当すると思われる。

ただし、人間が親しみやすいのは、『次元観察子』なので、ひとまずは、そのイメージとして扱った方が良いと思う。『次元観察子』と「惑星」には、相関関係があることは、自分の実践経験においても確認しているので、その二つを併用して理解することで、お互いの理解を深めることが可能である。

ヌーソロジー本論入門部

◆◆ヌーソロジー全体と実践編の位置づけ◆◆

ここからは、ヌーソロジー本論の入門部に入る。それは、「実践編」のことである。

まず、その重要性について、全体を踏まえつつ、位置づけを確認する。

ヌーソロジーの全体をカテゴリー分けしてみると、恐らく、およそ以下ようになる。

知識編	導入	ヌーソロジーはどのように生まれたのか？ 出自や経緯や歴史など。
	目的	ヌーソロジーの目的は何なのか？ 抱える方向性やモチベーションなど。
	背景	ヌーソロジー以外の状況を押さえつつ ヌーソロジーの立ち位置など。
	全体像知識	ヌーソロジーに取り組むにおいて必要な、 全体像や基本的な知識など。
実践編	初級	現実の見方に近いあたりの話。やりやすい領域と言えるが、 現実を見なければいけないので実は難しいともいえる。
	中級	初級の認識ができてないと難しいぐらいの領域。 およそψ5以降など。
	上級	中級の認識ができてないと難しいぐらいの領域。 およそψ7かψ9以降など。
	超上級	とてつもなく難しい領域。狂気。
その他		他の分野などと合わせて楽しむ、 他の分野などと併用して理解に必要な知性・感性を得る、など。

他にも分け方があるかもしれないが、ひとまずは上記の通りで良いと思う。

この中で、「知識編—全体像知識」は、これまで『ヌーソロジー基本概要部』で述べてきたジャンルである。人間にとって「頭に知識を入れるだけ」というのは、そう難しいことではないと言うことができるが、問題はそこから先の「実践編」である。

ヌーソロジーの肝となる所は、やはり、オコツトが説明していた『カタチ』の認識だと、半田広宣さんは言っていた。ここでいう『カタチ』というのは、『次元観察子』で

説明されているような精神構造のことだと思って良い。それは、余計な贅肉の一切を削ぎ落としたかのような、純粋なシステムであり、それ以外の情報は味付けに過ぎない、という側面もニューロロジーには多々ある。『冥王星のオコツト』も、やはり「この送信の目的は、わたし自身、つまり『変換人型ゲシュタルト』をあなたにプログラムすることにあります」だと言っていた。「ゲシュタルト」のプログラムとは、「カタチ」の認識であり、つまり、我々がこれまで3次元空間を体験して来たが如く、『変換人』の空間を体験することである。

「ニューロロジー入門部」では「実践編」の「初級」について扱う。しかし、本書では簡単にしか扱わないため、より詳しくは、ネットで公開している『Raimuのニューロロジー入門』の『**トランスフォーマー型ゲシュタルト・ベーシックプログラム・オマージュ**』を参照して欲しい。あれこそ、「実践編—初級」として、自分がベストを尽くして書いた重要な章である。

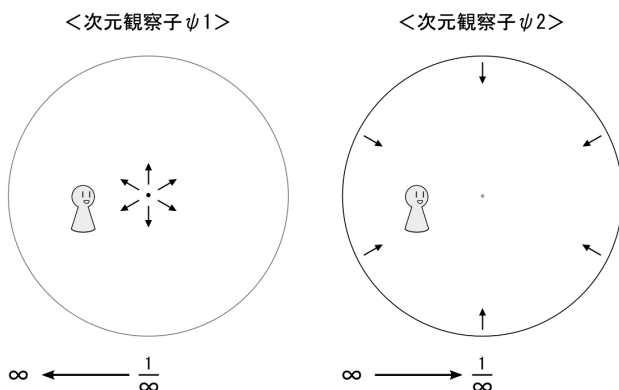
また、その他、実践編の理解のために必要な情報を、本書の94ページにある『**変換人型ゲシュタルト攻略情報**』に書いておいた。

◆◆現在の空間と次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ について◆◆

普通の空間と $\psi 1 \sim \psi 2$ の対応

まずは普通の空間の話である。普通の空間というのは、ヌーソロジーの観察子で言うと、『次元観察子 $\phi 1 \sim \phi 2$ 』の領域にあたる。ここは『点球次元』とも呼ばれている。

そして、『次元観察子 $\phi 1$ 』は『空間』と『ミクロ』、『次元観察子 $\phi 2$ 』は『時間』と『マクロ』に対応していると言われている。それから、以下の図のように、 $\phi 1$ は「ミクロからマクロへ」、 $\phi 2$ は「マクロからミクロ」に向かっているものにあたる。



『次元観察子 $\phi 1$ 』と『次元観察子 $\phi 2$ 』は、それぞれ『空間』と『時間』に対応するわけだが、簡単に言うと、『空間』が進化の方向性を持っている』『時間』は進化の方向性の反映である」ということになる。これは、押さえておくと良い。

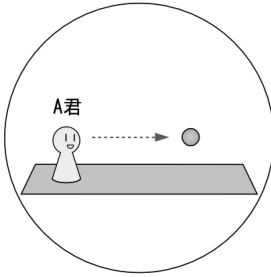
そして、『空間』と『時間』の『等化』というのを行うことで、高次元へと参入することができる。『等化』のためには、それぞれ『空間』と『時間』、あるいは、『ミクロ』と『マクロ』の正体をなるべく掴んでおいた方が良い。

$\phi 1$ と $\phi 2$ は、実は、万物の根元が、この『ミクロ』と『マクロ』に挟まれた物質宇宙から始まっているという、より深い意味も持っているものでもあるが、とりあえずはそんな所である。

「表相」について

続いて、『**表相**』というヌーソロジー用語があり、これも『次元観察子 $\phi 1 \sim \phi 2$ 』に絡んでいる。『表相』とは、単純に説明すると、『モノの見え姿』を作り出している空間の次元のことを言う。

図で説明すると以下ようになる。



※A 君から見た光景

左の図は単純に、A 君がボールを見ている姿を客観的にみた図である。そして、この図のA 君から見た視点を表すと、右の図のようになる。これが、A 君にとっての「視覚視野」にあたり、このボールの見え姿を作ってる次元が『表相』になる。この「視覚視野」は、捉え方次第では、純粋な「景色」なので、「平面」と見ることもできる。これを「視覚平面」と呼ぶ。

人間がこうして、「モノの見え姿」を捉えることは、『次元観察子 $\phi 1 \sim \phi 2$ 』において起こる。

ヌーソロジーでは、こうした『自分自身が見てるモノの姿』を捉えることからスタートするので、人間は、この「視覚視野」と「視覚平面」を持っているということを、押さえておいて欲しい。

ただし、この「モノの見え姿」は $\phi 1 \sim \phi 2$ においては時間と空間だけの世界なので、「モノの一瞬の像」と考えておくと良い。時間と空間においては現時刻としての一瞬しかないという意味である。

◆◆内向タイプと外向タイプについて◆◆

『次元観察子φ3』と『次元観察子φ4』は、それぞれ、心理学者カール・G・ユングの提唱した「内向タイプ」と「外向タイプ」との関わりが深く、絡めて考えていくと面白いため、それについて述べていく。

人間の自我は、基本的には『次元観察子φ1～φ2』の領域にあり、そこから、φ1～φ2→φ3へ向いて、→φ5（自己）…へと向かっていく方向性と、φ1～φ2→φ4へ向いて、→φ6（他者）…へと向かっていく方向性がある。前者は「内向タイプ」、後者は「外向タイプ」に該当すると解釈することができる。ユングは、「内向タイプ」と「外向タイプ」について、「意識のベクトルが内側に向いてるか、外側に向いてるか」という説明の仕方をしているが、ほとんど、この二つの方向性のことをいっているのではないかなと思われる。

内向タイプと外向タイプの説明で、ユングが述べたものとしては、以下のものがある。
(河合隼雄著「ユング心理学入門」より引用)

世の中には、ある場合に反応する際に、口には出さないけど「否」といっているかのように、まず少し身を引いて、そのあとでようやく反応するような一群のひとびとがあり、また、同じ場面において、自分の行動は明らかに正しいと確信しきって見え、ただちに進み出て反応してゆくような群に属するひとびとがある。

前者はそれゆえ、客体とのある種の消極的な関係によって、また、後者は客体との積極的な関係によって特徴づけられている。

・・・前者は内向的態度に対応し、後者は外向的態度に対応している。

以上のように説明されるのが、「内向タイプ」と「外向タイプ」である。

まとめると、次のようになる。

《内向タイプ》	《外向タイプ》
心のベクトルが内側に向き、 自分に関心が強い。 自分自身を追求することを良しとする。	心のベクトルが外側に向き、 他人に関心が強い。 社会に順応することを良しとする。
＜特徴＞ ・心のベクトルが内側へと向いている ・孤独で殻にこもりがち ・自分を表現するのが下手 ・自分自身で突き詰める哲学が理念 ・自分自身で作る価値を追い求める ・ひとり旅が好き ・他人とは関係なく動く ・一人で仕事をする方が好き ・意外と存在感が強い ・意外に頑固	＜特徴＞ ・心のベクトルが外側へと向いている ・社会的で殻にこもらない ・自分を表現するのが上手い ・身近な他者による風習が理念 ・肩書きを追い求める ・競争が好き ・他人に合わせたり、合わせさせたりして動く ・他人と仕事をする方が好き ・意外と存在感が薄い ・周りに流されやすい
＜キーワード＞ 独創性、非常識、自己満足、一人旅、 質、マイペース、芸術、哲学、理想、 イメージ、無意識、自分優位、天才、子供	＜キーワード＞ 社会性、常識、順位、群れ、 量、順応、政治、経済、現実、 物、意識、他人優位、一般人、大人
意識が『主体（$\psi 3$）』に向いている ヌーソロジー的に奇数系（等化側）	意識が『客体（$\psi 4$）』に向いている ヌーソロジー的に偶数系（中和側）

人間の自我は「 $\phi 1 \sim \phi 2$ 」内にあるので、まず、『主体（ $\phi 3$ ）』と『客体（ $\phi 4$ ）』との関わりが強い。そうした中で、「内向タイプ」は奇数系の観察子である『ノウス（NOOS）』の方向性に近く、「外向タイプ」は偶数系の観察子である『ノス（NOS）』の方向性に近いタイプにあたる。

実は、『ノウス（NOOS）』と『ノス（NOS）』の二つの方向性を、簡単にイメージすることに適しているのが、この二つのタイプだったりする。

◆◆「アニマ」や「こころ」や「シャドウ」や「ペルソナ」◆◆

続けて、ユングの心理学の話である。

『次元観察子』の探求は、人間の無意識世界の探求にもあたるため、ユングが提唱した「元型」というものとも関わることになる。

「元型」とは、無意識にある、何かの「型」のことを言う。人間の無意識は、とある「型」をベースに、精神的な事象が浮かび上がってくることがある。ユングは、人間の見る夢や、神話や童話の世界に、そういったものが見られるということを発見し、それらを「元型」と呼ぶことにした。

ユングの「元型」の種類はいくつかあるが、ここでは、「アニマ」と「アニムス」、「こころ」、「シャドウ」、「ペルソナ」などについて述べる。

「アニマ」と「アニムス」について

「アニマ」と「アニムス」は、人間が、より本性的な自分へと近づく際に出現してくる、異性的な存在であり、端的に説明すると、「アニマ」は、人間を無意識の世界へと導く女性的存在、「アニムス」は、人間を無意識の世界へと導く男性的存在と言うことができる。アニマは、一般的には男性に出現し、アニムスは、一般的には女性に出現するものである。つまり、一般的に立ち振る舞ってる姿とは、逆の性がそこで出てきて、それが無意識の世界の導き手になるということである。

これは、後述する「こころ (Soul)」とも関わりのある元型である。

「こころ (Soul)」について

「こころ」とは、元々は、ユングが「Seele」（英語で Soul）という言葉で呼んでいた元型だが、日本人のユング派カウンセラーの河合隼雄氏が、あえて、日本語で「こころ」と訳したものである。これは、「自分自身が内的に持っているもの」のことを言う。それは、特別な意味を込めての、自分の「心」ということである。自身の「主体」とも言えるし、潜在的な「自己」だと言うこともできる。恐らく、『奇数系の元止揚 $\phi 1, \phi 3, \phi 5, \phi 7$ 』がこれに対応するが、 $\phi 3 \sim \phi 4$ の段階においては $\phi 3$ にあたる。

人間は、外的環境に適応し過ぎると、この「こころ」を失ってしまう、と言われていく。つまり、外的適応と対極にあるものがこの元型である。

この「ころ」が、夢において女性像として現れた場合は「アニマ」、男性像として現れた場合は「アニムス」と呼ばれるようになる。つまり、先の二つは、「ころ」が実際の像として表れた姿だと言うこともできる。

「シャドウ」について

「シャドウ」は、簡単に説明すると、「通常時の自分があまり向き合っていない部分の自分」といった所である。つまり、「光の当たっていない時の自分」と言うこともでき、文字通り、「自分の影」ということになる。

人間が普通に一般人の中で生活をしていると、「常識を守る自分」というのが、必ずいるものだが、同様に、「その自分が向き合っていない自分」や「抑圧されている自分」というのも存在することになる。これは、ヌーソロジー的には、『客体（ $\phi 4$ ）』にとつての『主体（ $\phi 3$ ）』が該当するようになる。特に、『客体』を「光り輝くもの」という風に捉えていた場合、『主体』は「その影」となるため、一層「暗いシャドウ」として映ってくるようになる。しかし、本来は『主体』として機能しているものであるため、「シャドウ」を突き詰めていくと、「ころ」が見えてくるようになる。

「ペルソナ」について

「ペルソナ」は、「仮面」という意味を持っている元型だが、「シャドウ」や「ころ」とは逆であり、「外的環境に適応した自分」や「常識を守る自分」のことを言う。人間の持つ「自我」にも近く、 $\phi 3 \sim \phi 4$ の段階においては $\phi 4$ にあたる。観察子全体からの対応では、『偶数系の元止揚 $\phi 2, \phi 4, \phi 6, \phi 8$ 』がこれに該当する。

「ユング心理学」と「錬金術」との掛け合わせとして、普段の意識を持った人間の状態から「ころ」と「ペルソナ」のように相反するものを統合することにより、より高次の元型と言える「自己 (Self)」を見出すことができる。

ユングの見解では、（これは男性のケースとされているが）人間はまず先に「ペルソナ」を鍛えておき、成熟した段階で、「アニマ」との対峙を行うべきである。例外的に、芸術家・霊的指導者・心理療法家といった特別な人間は、早期に「アニマ」との対峙が行われる…というようなことが言われている。

変換人生活のためのヒント

これから、本書のテキストのオリジナル部分として「**変換人生活のためのヒント**」というのを章のタイトルとして、エッセイのような、ヌーソロジー理解に役立ちそうな文章を書いていきたいと思う。

この章では、そのタイトルに相応しいように、自分が考えていること・・・「ヌーソロジー」や『変換人』と絡んでいそうで、生活にも結びついていそうなこと・・・を述べることにより、何か生活のヒントになるのではないかな？あるいは、ヌーソロジー理解のヒントにもなるのではないかな？という目論みの元、自分の書きたいことを書いていこうと思う。

■反転認識のヒント

ヌーソロジーの目的である『変換人型ゲシュタルト』の習得の基礎とも言える、『次元観察子φ1～φ5』あたりの認識は、まず、「反転」を認識するという「反転認識」が入り口となっており、この「反転認識」は、「4次元認識」ともほぼ同義であるが、こうしたことに関して「簡単にできない」などという声も上がる。代表的な所としては、「ローレンツ収縮」の所などがそうだが、こうしたことの成功に必要なヒントを、筆者（来夢）の経験・体験も踏まえて、書いていこうと思う。

反転認識のヒント？「右脳発育」

まずは、「右脳発育」というテーマについて述べていくが、これは、ヌーソロジー以前、自分が取り組んできたことの振り返りでもある。

人間の脳には「左脳」「右脳」という部位があるという通説があるが、自分がその中の「右脳」に対して関心を持つのは割と早く、中学か高校の辺りから、その辺りの話には強い関心を持ち始めていた。通説としては、左脳は「論理・思考・計算・記号処理・時間把握」などを司っていて、右脳は「感性・直感・ひらめき・イメージ・空間把握」などを司っているとそれぞれ言われている。左脳の能力は一般的な仕事で使われることが多いため、「仕事用の普通の脳」ということになり、一方で右脳は、「芸術家や発明家の脳」という風に言うことができる。また、左脳は直列的な思考を、右脳は並列的な思

考を得意とするなどの説もある。

（最近、自分が調べた所によると、これらの二つの脳の働きは、科学的に証明されているものではないらしい。しかし、人間がこうした二つの能力を持っていることは確かだと思うので、そういうものとして話を進める）

こうした「右脳」の働きに対して非常に魅力を感じた自分は、早速、右脳を鍛えたり、豊かにするようなことをしたいと思い始める。

右脳を鍛えるようにして過ごしたい・・・ということで、まず、音楽が良いということなので、音楽はなるべく広いジャンルの良いものを聴くようにした。イラストなども好きなので、ネット上にあるものを色々を集めたりした。一応、自分で絵を描くことも、している時はしていた。（公開できるほどには上手くないので、公開することはあまり無いが・・・）芸術全般は元々関心があったから好きだし、興味を持ったものは何でも取り組んだりした。

それから、右脳を活性化させる方法として「予想外のことが起きるのを体験する」というのがある。これは確かに効果的なことだと思う。（この点、デジタルを用いた手段として、質の良いコンピューターゲーム、アクションゲームやシューティングゲームなどは結構良いのではないかとと思う。）そういうこともいくらか意識していた。

大学時代に入り、右脳を使ってハイスピードで本を読む「速読」というのもやった。中でも七田真という人の「七田式速読法」というのに目をつける。一番影響を受けた書籍としては『七田式成功脳をつくるスーパーリーディング』というのがある。そういった本を読んで影響を受けたりし、速読に挑戦していた。その結果、右脳速読は本気を出せば出来ることは出来るが、あまり本気を出しすぎると、脳が消耗し過ぎてかえって次の日に頭が使い物にならなくなったりするため、かえって効率が悪いことが分かった。今では読み飛ばしには使う時は使うけれど、読むスピードはやはりほどほどにして読んでいる。そういう経験などをした。

そうこうしているうちに、確かに頭の回転は速くなった。特に、右脳が得意とする「並列的な思考」の能力は、「時間軸のない空間で思考する」ということに通じているのではないかとと言えるような気がする。

こうした高度な頭の使い方は、実業家でもあり作家でもある「苦米地英人」という人の得意とする所であり、この人も「時間は未来から過去に流れている」ことを前提と

ヌーソロジー用語一覧

これまで本書で出てきたヌーソロジーの用語を整理すると、以下のようになる。

他にも数多くのヌーソロジー用語があるが、ひとまずは以下を押さえておくといい。

＜ペンタープ・システム関連＞

負荷、反映、等化、中和、対化、付帯質、精神

＜タカヒマラ全体像関連＞

タカヒマラ、オリオン、シリウス、プレアデス、スマル、
定質、性質、反定質、反性質、ノウス (NOOS)、ノス (NOS)

＜観察子関連＞

次元観察子 ψ 、大系観察子 Ω 、元止揚、調整質、中性質、変換質、
凝縮化、顕在化、脈性観察子 ϕ 、空間観察子 α

＜高次の観察子関連＞

ヒト、真実の人間、思形、感性、人間の定質、人間の性質、観察精神

＜基本概要部、その他＞

人間型ゲシュタルト、変換人型ゲシュタルト、人間の内面、人間の外面、
迷化、融解作用、キアスム、円心、重心、最終構成

＜ヌーソロジー本論入門部に登場＞

カタチ、最小精神、差異、同一性、持続、奥行き、幅、
表相、点球、垂子、垂質、球精神、
位置の交換、位置の等化、位置の中和、位置の変換

＜ペンタープ・システム関連＞

負荷：

とある始原となる存在があったとして、そこから開始する作用。

数字では、「1」に対応する。

反映：

『負荷』という開始の力に対して生まれる、それとは逆向きの作用。

数字では、「2」に対応する。

等化：

『負荷』と『反映』という、背反するものを統合するような「回転」の作用、または、対称性を見出す作用。数字では、「3」に対応する。

中和：

背反するものを統合する『等化』に対して、分離するような「逆回転」の作用、または、双方の対称性を見出すのを拒む作用。数字では、「4」に対応する。

次の「5」に対応するものが、新たな「1」である『負荷』を作るようになる。

対化：

奇数と偶数に対応している組が作る対立関係。

付帯質：

対化を『中和』する力そのもの。

人間が「物質」と呼んでいるものでもある。

精神：

対化を『等化』する力そのもの。

物質的なモノの見方を外す方向性にある。

＜タカヒマラ全体像関連＞

タカヒマラ：

『オリオン』『シリウス』『プレアデス』『スマル』のある宇宙全体の総称。

オリオン：

宇宙の根源的な存在のある意識の領域。一神教的な領域と言える。

シリウス：

『ヒト』という存在のいる意識の領域。一神と地上の中間の多神教的な領域と言える。

プレアデス：

「人間」のいる意識の領域。地上的な領域と言える。

スマル：

「虚無」と呼ばれる意識の領域。

定質：

『シリウス』→『オリオン』へと向かう力。

シリウス領域においての『等化』の方向性。

「太陽」や「植物」の持つ力と関係あり。

性質：

『シリウス』→『プレアデス』へと向かう力。

シリウス領域においての『中和』の方向性。

「月」や「動物」の持つ力と関係あり。

反定質：

『プレアデス』→『スマル』へと向かう力。

プレアデス領域における『中和』の方向性。

物質先手の流れ。

反性質：

『プレアデス』→『シリウス』へと向かう力。

プレアデス領域における『等化』の方向性。

精神先手の流れ。

ノウス（NOOS）：

『スマル』→『プレアデス』→『シリウス』→『オリオン』へと向かう力。

総合的に『等化』の方向性を持つ、奇数系の『観察子』。

「能動的知性」と言われる。「青の流れ」として表記される。

ノス（NOS）：

『オリオン』→『シリウス』→『プレアデス』→『スマル』へと向かう力。

総合的に『中和』の方向性を持つ、偶数系の『観察子』。

「受動的知性」と言われる。「赤の流れ」として表記される。

<観察子関連>

観察子：

元々は「数」という名称だったらしい。

「真理を解き明かすための、およそ13の要素」と言えるもの。

ペンターブ・システムに対応し、13という数が重要視されるが、

13の『反映』である14番目も重要視されている。

「1～8」に重要な区切りがある。

球精神：

『次元観察子 ψ 7～ ψ 8』に対応。

『顕在化』の際、無数の「身体」から出来上がる。

位置の交換：

『次元観察子 ψ 3～ ψ 4』が顕在化し、

「内在」意識が『人間の外面』で「見える世界」で、

「外在」意識が『人間の内面』で「見えない世界」であるという、

内部と外部の入れ替わり関係がハッキリと分かること。

位置の等化：

意識が『次元観察子 ψ 5』に入ること。

『ハーベスト・プログラム』というスケジュールによると、1999年に起きたらしい。

位置の中和：

意識が『次元観察子 ψ 6』に入ること。

『ハーベスト・プログラム』によると、2012年に起きたらしい。

位置の変換：

意識が『次元観察子 ψ 7』に入ること。

『ハーベスト・プログラム』によると、

2013年に「位置の変換の開始」があったらしい。

ニューソロジーで「2013年」が重要視されている理由にもなっている。

※

- ・ このサンプルは書籍版の一部を抜粋しています。
- ・ サンプルなためページ番号は省略しています。
- ・ 書籍版の図は白黒、電子版の図はカラーとなっております。
- ・ 電子版は文字サイズが自由に変更可能なため、
書籍版とレイアウトが異なります。